

医史学と私

蔵方 宏昌

医史学との出会い

大学の教養科目に宗教学があり、その講義には毎回スライドを交えて日本の民俗宗教の話があった。私はスライドに写る土着の祭礼や神道・仏教などの儀礼に興味をひかれ、古本屋に行っては、民俗学の本を買って読み、日本民俗学会に入った。

医史学に興味を持つようになったのは、昭和45年(1970)産婦人科に入局してからである。病棟に助産学講座のセットがあり、その第1巻に助産の歴史が載っていた。そこに書かれた江戸時代の賀川流産科を読んで驚いた。私たちが学んだ産科学と大差なかったからである。昔の産科はどうだったのか。詳しく知りたくなかったが、江戸時代の産科書は手に入りづらくなっていた。

医史学会があることを知り、入会手続きをして、順天堂大学で毎月開かれる例会に出た後、神田の古本屋街を回って、少しずつ医学史の本を集めた。「日本医史学雑誌」に載る広告で、戦前に発行した『日本産科叢書』の復刻版を思文閣出版が出していることを知り、購入すると、入手しやすい江戸時代の産科書が活字化されて多数載っている。

昭和47年(1972)1月、血清肝炎で足掛け4ヶ月入院し、札幌冬季オリンピックや連合赤軍浅間山荘事件をテレビで見る以外は『日本産科叢書』を読んだりして過ごした。

後日、小川鼎三先生から喫茶店に誘われた時、教養科目の授業で宗教学の講義を受けたことが民俗学に関心を持ち、それが医史学に繋がったことを伝えた。小川先生は「だから僕は医学部に教養課程が必要だといっているんだよ」と熱く語られた¹⁾。

総会初参加

昭和47年9月、仙台で第73回総会があるというので、体力も回復した8月、参加申し込みをし、東北大学に行った。講堂に入ると、ちょうど小川鼎三先生が「医史学と私」という特別講演をされていた²⁾。

その夜、懇親会で大鳥蘭三郎先生は「小川先生は羨ましい。僕もああいう講義をしたい。」と挨拶された。この挨拶を大塚恭男・矢部一郎両先生も覚えておられた。後に野口英世会館で大鳥先生が第80回総会を主催するとき、会長講演を何にするか迷っていた。それを御覧になり、大塚・矢部両先生は「医史学と私」はどうですかと提案され決まった³⁾。

一人ずつの紹介があり、酒井シヅ先生が「一番若い会員です」と紹介されたのが、岡山大学の学生だった石田純郎先生である。私に自己紹介の番が回ってきたので、学生時代から民俗学に興味を持っていたことを話した。

大塚・矢部・酒井の諸先生と親しくさせていただいたのはこの懇親会からである。翌48年10月の第74回総会では矢部先生と同宿し、一緒に長崎市内を見学したりした。この会から三輪卓爾先生や新潟の星榮一先生とも親しく交流するようになった。

編集委員会

医史学雑誌の編集委員会が刷新されることになり、編集委員長の大鳥先生と大塚・酒井両先生が留任し、矢部一郎(生物学)、樋口誠太郎(日本史)、室賀昭三(漢方)、矢数圭堂(漢方)の各先生と私(民俗学)が加えられた。

編集委員会は編集委員と編集顧問の小川先生が参加され、2ヵ月に1回ほど開かれた。新メンバー

で19巻4号(昭和48年12月)から発行された。

順天堂大学での編集会議が終ると、大塚・矢部両先生を中心に、居酒屋で“第2編集委員会”が開かれ、医史学雑誌だけでなく、学会の運営など、いろいろな事を話し合った。

昭和49年(1974)栃木県の佐野厚生病院に出張したが、編集委員会には欠かさず出席し、佐野に深夜列車か早朝の列車で戻った。

「洋学二百年記念展」

『解体新書』が安永3年(1774)に刊行されて200年目に当たる昭和49年(1974)8月13日~18日、東京日本橋三越本店で「解体新書出版二百年記念・洋学二百年記念展」が開催された。この準備で東京在住の私も手伝うことになり、大塚・矢部・酒井先生らと数日間三越で夜遅くまで作業した。

この展示の反響は大きく、小川鼎三先生と緒方富雄先生が事前に皇太子殿下(現上皇殿下)御夫妻に展示に関する話を御進講され、御夫妻は三越の展示を御覧になられた。この展示以後『解体新書』翻訳事業が日本史の教科書に記載されるようになった。

展示と並行して第75回医史学会総会は、第16回蘭学資料研究会大会と合同で8月18日銀座日産ギャラリーのホールで開かれた。総会2日前の8月16日東京都内の洋学関係史跡をバスで巡った。このバスツアーの史跡案内書「江戸洋学史めぐり」を私が書いて参加者に配られた。

また三越劇場で作家司馬遼太郎氏と緒方富雄先生による「洋学200年」の対談、そしてミュンヘン大学のハインツ・ゲルケ教授による「18世紀におけるヨーロッパ医学と日本の関係」と題する公開講演が行われた⁴⁻⁶⁾。

総会での初口演

昭和52年(1977)5月岐阜・川島の「エーザイ内藤くすり博物館」で第78回総会が開かれ、私も初めて演題を出した。「古代医学における帯下について」⁷⁾と題して、婦人科の漢方治療を古典から紹介しようとしたが、ほとんど前置きぐらいを話

して時間切れになってしまった。

不慣れな発表を見て矢部先生から学会発表のコツを御教示いただいた。短い時間での発表では言いたい事、結論を先に言い、時間があれば資料の紹介などをするなど、以後の口演では教えられた通りにしたら、時間のゆとりがとれた。

医史学研究室入室

私の入院中に産婦人科の教授が代わり、教授から「医史学をやめろ！お前は産婦人科だけやっていればいいんだ！」と言われ居心地が悪くなった。昭和大学で医史学会に入っているのは私だけである。

昭和52年(1977)10月、東京厚生年金病院の2年間出張が終ると、昭和大学産婦人科に戻らず、順天堂大学医史学研究室に研究生として入り、夜間診療所を開業した。近所の病院に勤める産婦人科医局の先輩が肝炎になったため、しばらくは医史学研究室と病院の産婦人科を半々通うこととし、産婦人科の宅直を每晚続けた。

医史学研究室では小川・酒井両先生の指導を仰ぎ、秘書の鈴木滋子さんの世話になり、研究と医史学会諸事の手伝いをした。

研究は主に産婦人科史だったが、医史学会の会員や会員以外の人たちの要望や質問に応じたりしているうちに、産婦人科史以外の関心や知識も増えていった。学会の例会で演者がいない時は、私が穴埋めに話をしているうちに、日本医事新報社の新しい雑誌「Medical Way」と日本医療企画の医療機関向け雑誌「ばんぼう」、そして協和企画社の「漢方診療」から連載の依頼がきた。

「Medical Way」には「目で見る医学の歴史」として日本の産婦人科の歴史を、「ばんぼう」には「名医列伝」として東西の医師のエピソードを、「漢方診療」には漢方医学の歴史的内容を書いた。

2つの刊行会

日本医史学会創立50周年記念事業として、『図録日本医事文化史料集成』全5巻の発行がある。医史学会で刊行会を作り、資料集めから編集発行まで医史学会総力をあげての製作である。

昭和52年(1977)から昭和54年(1979)にかけて刊行された。第1巻は考古・絵画、第2巻は外科・解剖、第3巻は医療機器・薬、第4巻は祭祀・信仰・はしか絵・養生・軍事医療・労働衛生・文芸医事、第5巻は人物・各県の医史である。私は図版解説の一部と、第5巻の東京都の医史と医史跡を書いた⁸⁾。

医史学会刊行の書籍だけではなく、個人の著作で刊行会を作ったのは、三木栄先生の『朝鮮医事年表』である。『朝鮮医学史及疾病史』『朝鮮医書誌』の名著を出されている三木先生が『朝鮮医事年表』を出版したいという話を聞いて、私は年賀状で、出版を楽しみにしていますと書いた。

すると突然、医史学研究室にダンボールが送られてきた。宛名は私になっている。三木先生の手紙に「自費出版するだけの金銭的ゆとりがないので、医史学会で何とかして欲しい」と書いてある。狭い医史学研究室に積まれてあるダンボール箱を見て酒井先生が「これ何？」とびっくりされたので、話をすると「小川先生に迷惑かけないようにしてよ」と返事があった。私ももっともだと思い、自分で数社の出版社に当り、原稿を見せて相談すると、異口同音「編集費が大分かかる」ことと「余りに専門的過ぎる」ことをあげ、暗に断られた。

原稿は清書されず、欄外などに書き込みがあり、読みづらい。三木先生と連絡をとらないと分からない所も多いので、普通の本の編集以上に連絡が必要である。自費出版を受けてくれる出版社に頼むしかないかな、と預貯金がどれだけあるか、思いめぐらしていると、思文閣出版の長田氏から「三木先生から原稿を医史学研究室に送ってあるから見て欲しいといわれたので原稿を思文閣に送って欲しい」と電話がきた。

送料は私費で払った。それから2週間程して大塚先生が医史学研究室に入ってこられて、「三木先生から手紙がきて、出版を頼まれた」と酒井先生に話された。二人で相談の結果、医史学会と東洋医学会共同で刊行会を作ることになり、両学会の役員が順天堂大学で会して刊行会が結成された。『朝鮮医事年表』は昭和60年(1985)思文閣

出版から無事出版された⁹⁾。

最近は個人で学術書や専門書を出すことが資金面で難しくなっている。関係学会が共同で刊行会を作って出版できるようにすることも考えるべきかも知れない。

資料館開設の手伝い

平成3年(1991)群馬県医師会家崎智会長が医史学研究室に來られて酒井先生と相談されていた。医師会館(群馬メディカルセンター)の部屋が空いたので、医学資料館にしようと思い、使わなくなった医療機器を群馬県内から集めたが、どのようにしたらいいのかわからないので教えて欲しいという。翌年9月に医師会館で「群馬県民健康展」を開催するので、それに合わせて資料館を開きたいと希望されていた。酒井先生は即座に「蔵方さん手伝いに行ってください」と私を推薦された。

私は早速、前橋に行き医師会館に集めてある医療機器を見たが、昭和に作られた物ばかりである。医療機器だけ並べても見にくる人はいない。担当の中島忍氏と相談し、テーマを設けて、部屋の半分に医療機器を並べ、半分は私の蔵書や絵画などを並べることにした。

群馬県の「地域医療資料館」が健康展開催の日を開館し、第1回企画展示として「眼科」の関係資料を並べた。その後、年1回の展示替えをして、第2回産科(腹帯)、第3回伝染病との闘い、第4回薬袋・診察券及び処方箋〈特別展示〉伊古田純道、第5回群馬の天然痘、第6回病氣と祈り一群馬の民間信仰、第7回日本の解剖、第8回クスリ、第9回医の先人、第10回県内の医師が所蔵している資料の展示、第11回医師を称えた石碑及び墓碑、第12回昭和30年以前に建築された医院、第13回絵画で見る医療風俗、第14回野口英世、第15回医学医療を変えた医書一西洋編一、第16回医学医療を変えた医書一東洋編一、第17回病草紙と日本人の病、第18回源氏物語でみる平安時代の病、第19回外国から医学が入ってきた時、第20回江戸時代の外科というテーマで展示を続けた¹⁰⁾。その後も「温泉医学」などと続けたが、今はコロナウイルス感染の流行で展示を中止している。

私の住んでいる区内に「昭和のくらし博物館」があり、医療関係の企画展示を私も手伝っている。小泉和子館長から、鳥根県津和野町で大正6年(1917)建築の木造病院を修復し医学資料館にするので医学の歴史に詳しい手伝いを探しているが、どうかと話があった。

私は建物修復中から通い展示の構想を練った。大正時代の病院らしい展示にするため、古い顕微鏡、水銀血圧計、古い両耳聴診器、葉巻筒、紙製人体模型、科学実験器具、家庭用配置薬の薬箱などを貸した。

平成28年(2016)11月「旧畑迫病院展示室」として開館し、同時に第1回企画展示は見学者が関心持ちそうな「医療と芸術」として医療に関係ある絵巻物・浮世絵・掛軸・人形などを展示した。

企画展示第2回は平成29年(2017)津和野藩主亀井家入城400年記念に合わせて「江戸時代の医学」、第3回はジェンナーの牛痘接種の論文発刊220年を記念して「天然痘との闘い」、第4回は「日本の解剖図〈江戸・明治〉」、第5回は開館5周年記念として「妊婦腹帯の風習」をテーマに、浮世絵・江戸時代の書籍・妊婦腹帯などを展示した。

書籍盗難事件

私が医史学研究室に行くと、酒井先生ら研究室の仲間が廊下のロッカーそばに置いてある大きな布袋を囲んでいた。「これ蔵方さんの?」と聞く。神田の東京古書会館で古本市があると、私が両手に古書の包みを掲げて研究室に置いておくので、私の物と思ったらしい。私は一度も布袋で古本を運んだことがない。私が「僕のものではない」と言うと、一人が袋を開けた。

すると、中から沢山の本が出てきた。どれも研究室の蔵書で、値打ちのある本ばかりである。盗もうとして研究室から持ち出し、一時廊下に置いておいたものと思われた。

私はハッととして研究室の書庫に置いていた『ヒポクラテス全集』の古書を思い出し、書庫を探したがない。1657年イタリア・ジェノバで発刊したギリシャ語・ラテン語対訳の希観本である。以前、ビデオ制作の会社が古いヒポクラテス全集を

撮影したいと問い合わせがあったが、研究室には日本語や英語訳があるが、古書のギリシャ語版がない。撮影のために持ってきて、その後、研究や教育に使ってもらえるよう置いておいた。

その頃、井上書店から送ってきた目録に同じようなヒポクラテス全集が載っていたので、私は井上書店に行き見せてもらうと、表紙の装幀や傷のつき方が同じである。研究室から盗まれたことを伝え、売らないよう頼んだ。研究室に戻ると本富士署の刑事が来ていて事情を話した。

刑事と一緒に井上書店へ行き、盗品を持ち込んだ人を自動車免許証の控で確認すると、最近医史学会に入会した男性だと分った。私は覚えがなかったが、医史学研究室の秘書と医史学会の担当職員が覚えていた。井上書店に持ち込んだのは私の本だけでなく、医史学研究室の和洋古医書と講談社の「野間科学医学研究資料館」所蔵の西洋古書も含め10点余りあった。

ヒポクラテス全集が盗まれた物である証拠が欲しいというので、学生の講義用に撮っておいたスライドから紙焼きをしてもらい刑事に渡した。刑事が「厳罰にして欲しいか」と聞くので、「医史学会にみんな研究するために入ってくると信じていたのに、金銭目的で盗むために入ってきたのは許せない。厳罰にして欲しい」と答えた。その旨の申状書を出して欲しいというので申状書を出したが、犯人は初犯であり、金額を返したという理由で不起訴になったという。

大胆で手際の良いことを考えると、私たちがまだ気付いていない書籍がなくなっている可能性があり、他の施設でも行っていると思われる。不起訴になったことで、犯人は反省の色もなく、医史学研究室の出入りを再び許可してくれるように頼んできたという。当然医史学研究室の出入りは断り、医史学会もやめてもらった。

医史学センターの夢

盗難事件でもう一つ心配したことがあった。ヒポクラテス全集以外に、国際書房や大井書店から購入した西洋古典医書や複製本を20数冊医史学研究室の書庫に置いてあるからである。ダンボー

ルの中に入っていたそれらの本は、上に雑誌が置いてあったので無事だった。順天堂大学医史学研究室が医史学センターとして機能するのに役立つてもらいたいと思い置いておいたのである。

東京には講談社経営の「野間科学医学研究資料館」（文京区）、金原出版経営の「医学文化館」（青梅市）がある。「野間科学医学研究資料館」は主に西洋医学の古典を集めていて、「医学文化館」は多くの医史学会会員が蔵書や江戸時代の医療器具、浮世絵、掛軸など巾広く寄贈・寄託していた。

これらの資料館と医史学会の基地となっている順天堂大学医史学研究室があることで、研究者の役に立つと共に、将来は私も蔵書や医療器具などを寄贈したいと考えていた。

しかし、出版社の不況で両館は閉館した。「医学文化館」の医史学資料はどうなったか不明だが、「野間科学医学研究資料館」の蔵書は京都の「国際

日本文化研究センター」に寄贈された。順天堂大学医史学研究室の書庫は狭く、各大学の図書館は必要な本しか引き取らなくなっている。医史学センターは夢のまた夢となった。

参考文献

- 1) 小川東洋編集発行『小鼎追悼録』318 昭和61年.
- 2) 「日本医史学雑誌」19巻4号365-376 昭和48年.
- 3) 「日本医史学雑誌」25巻2号151-156 昭和54年.
- 4) 『日本医史学会総会百回記念誌』171~172 2000年.
- 5) 『洋学二百年記念展』1974.
- 6) 「日本医史学雑誌」20巻3号 昭和49年.
- 7) 「日本医史学雑誌」23巻2号170 昭和52年.
- 8) 『図録日本医事文化史料集成』第5巻235-238 昭和54年.
- 9) 『日本医史学会総会百回記念誌』389 2000年.
- 10) 『財団法人群馬メディカルセンター地域医療資料館 企画展20回のあゆみ』平成23年.